

十日町の染色方法

新潟県十日町市は豪雪地帯であるため、染色に適した軟水が豊富である。雪解け水が地中に浸透することで、色の定着の妨げとなるミネラル分がろ過され、蒸しやすすぎに最適な化学的に不活性な水になる。十日町の織物工房では、植物繊維の織物であろうと絹織物であろうと、自分たちで染めるのが一般的だ。

越後上布のような植物繊維の織物の場合、通常は織る前に糸を染める。その後、織機で異なる色の糸を交差させ、格子柄を作るのと同じような方法で柄を作る。十日町に特に関連するもうひとつの方法は、拵（かすれ）と呼ばれる防染の技法である。染め職人は、模様にしたがって主糸のまわりに別々の綿糸を結びつけます。木綿の糸が染料の浸透を防ぎ、本糸の一部を白く保つ。織機では、この白い部分が並んでイメージやパターンを作り出す。

絹織物の場合、絵柄の作成は通常、織り上げた後に友禅と呼ばれる防染の技法で行われる。まず、職人が白絹の染料が沁み込まないような場所に糊を塗る。その後、染料を刷毛で、フリーハンド、あるいはスクリーンプリントの工程と同じように型紙を使って刷り込んでいく。最終段階では、背景を染める際に絵柄を保護するために糊で覆われる。

絞りと呼ばれる絞り染めの技法も絹に使われる。生地が染料に浸される前に、染料が完全に浸透するのを防ぐため、小さな部分が結び目で止められたり、糸で縫われたりして、斑点状の波状のグラデーションを作り出す。近年では、友禅と絞りを組み合わせた斬新な柄を作る地元の工房もある。